

## シリーズ「日本遺産」

## 第4話

今回から、日本遺産「地蔵信仰が育んだ日本最大の大山牛馬市」第2章、大山牛馬市の礎となる牛馬信仰を中心に紹介します。

## キーパーソン・基好上人

大山寺が信仰の核とした地蔵菩薩の功德は六道に及び、生きとし生けるすべてを救う仏とされてきました。このことから、平安時代に大山寺の高僧であった基好上人が「大山寺の地蔵菩薩は農業神であり、牛馬守護の仏である。」と唱え、牛馬安全を祈願する守り札を配るとともに、牧野での放牧も推奨しました。

平安時代末の承安2（1172）年、大山寺では山内での争いが起き、大智明権現社を焼失する事態となりました。このため大山寺の三院（南光院・中門院・西明院）は地元の有力者を頼って再建を誓って取り組みました。その際に、大山寺の最高位にあった人物が基好上人です。この大智明権現社の再建に関する内容は、大山寺所蔵の鉄製厨子（国重要文化財）の銘板に刻まれています。また、基好上人は日本臨濟宗の開



国重文「鉄製厨子」

祖、栄西に密教の奥義を教えた師としても知られています。

この基好上人の取組みから、次第に大山の「牛馬信仰」が広まってきました。

## 大山の牛馬信仰

平安時代の説話集『今昔物語集』には次のような話が載っています。

法隆寺に入った僧明蓮は、法華経の第八巻がどうしても暗唱できま

せんでした。長谷寺で修業しても叶わず、熊野で夢告を受けて住吉に行き、さらに住吉で伯耆大山の地蔵権現に尋ねるようお告げを受けました。伯耆大山の地蔵権現は、明蓮の前世は「美作から伯耆大山への参詣に荷を運んで連れられた牛」であると告げます。さらに宿坊に繋がれていた時に法華経を聞いたおかげで人間に生まれ変わったものの、八巻目は

聞くことができなかつたので、今でも覚えることができないのだという因縁も告げました。これを知った明蓮は更に修行し、ついには暗唱できるようにになりました。大山の牛馬信仰を伺うエピソードです。

「牛」と言えば、肉牛か乳牛を連想するのではないでしょうか。当時の牛は、荷物の運搬や農耕で活躍する「役牛」でした。役牛は、生計の柱である農耕に欠かせない家族同然の大切な存在でした。そのため、人々は牛馬のご利益がある大山寺まで、遠方からでも牛馬を引き連れて参詣し、守り札をいただき延命を祈ったのです。それと同時に、遠方からの参詣には牛馬連れで参ることがあったことも知られます。

## 大山麓の牧野

大山の牧場は基好上人が推奨した牛馬の放牧の適地で、ここで育った体格の良い放牧牛は、大山参詣者の目に留まりました。また参詣者が引き連れた牛馬もあって、大山の春祭りなどに牛くらべ、馬くらべが開かれました。

これに端を発し、鎌倉時代以降、次第に牛馬の交換や売買が盛んに行われ、やがて市へと発展していったと伝わっています。

（人権・社会教育課 文化財室）

## 実験で食生活を考える

## 大山公民館大山分館

大山分館と地域自主組織まちづくり大山の共催で、7月29日に「親子おもしろ実験教室」を行いました。今年のテーマは「着色料」。何気なく食べている食品に使用されている着色料ですが、その中でも、合成着色料（タール系）と天然着色料では何が違うのか、実験を通して学びました。

白い毛糸（羊の毛・タンパク質）を合成着色料で染めると色が抜けないことを実験で知った児童は「洗っても色が落ちなくてびっくりした」と驚いていました。天然着色料のほうの色が抜けました。

一緒に参加した保護者からも「祭りの時など、子どもは特に鮮やかな色合いのかき氷などを好むけれど、買い与える前に少し考えようと思いましたが、おもしろい実験でした」と声が上がりました。



▲お父さんと楽しく実験